

| | | | | | |
|------------|---------|-------------------------------|------|----------|-----|
| 6-5 | | | | | |
| 主題 | | 1人で外出できない利用者に対する養護老人ホームでの外出支援 | | | |
| 副題 | | 外出の効果と見えてきた課題について | | | |
| キーワード 1 | 養護老人ホーム | キーワード 2 | 外出支援 | 研究(実践)期間 | 6ヶ月 |

| | | | | | |
|-----------|----------------------|--|--|--|--|
| 法人名・事業所名 | 社福) 同胞互助会 養護老人ホーム偕生園 | | | | |
| 発表者(職種) | 栗原八重(生活相談員) | | | | |
| 共同研究(実践)者 | なし | | | | |

| | | | |
|----|--------------|-----|--------------|
| 電話 | 042-541-1236 | FAX | 042-545-5315 |
|----|--------------|-----|--------------|

| | |
|-------|--|
| 事業所紹介 | 昭和34年に開設した140床の施設です。敷地内には園庭や鳥小屋、季節を感じられる桜や梅等の木々も多く、地域の方々との交流も盛んに行われています。また、同法人の特養や在宅サービス事業、診療所を敷地内に併設し、内外の各事業所と連携を図りながら安心して生活をして頂けるよう取り組んでいます。 |
|-------|--|

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

本来、養護老人ホームとは、身の回りのことが自分で行える自立した方から、少しの手助けや働きかけがあれば自分で行える方が入所の対象となっている。しかし、長期間の入院により高齢化が進み、同時に身体面、認知面が低下し援助を必要とする方が年々増加しているのが現状である。更に、近年は新規の入所相談の時点で、要支援・要介護状態である場合も少なくない。このように利用者の状態の変化に伴い、利用者の活動性や行動範囲が徐々に狭くなってきている。

一方で、養護老人ホームに求められる役割は多様化し、当施設では配置基準に満たない状況が続くなかで、日々の業務に追われながら、利用者との関りが希薄にならないよような業務の見直しを行った。その一つが、利用者の外出に対する要望であり、どうすれば応えられるかを課題とし、個別的または集団的に取り組むこととした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

外出したいが一人では行えないと感じている利用者に対し、諦めずに外出支援することで、単調な生活の中に達成感や幸福感を得られるのではないかと。利用者のその人らしい自己実現と、職員とのよりよい関係を築くことを目的とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

取り組みとしては、グループに対する支援と個別支援に分けて行った。

- ① 複数の利用者を対象にしたグループ対応では、前年度から企画を作成し、予算を計上する等の準備から始めた。毎月の会議では進捗状況を確認し、多職種間で意見を出し合った。また、対象者の選出の際は、次のポイントを押さえて行った。
 - ・介護保険未申請者であり、施設内で過ごす時間が多く外出頻度が減っている方
 - ・何らかの要因(認知面、転倒歴、搜索願の履歴等)により一人での外出に制限がある方

なお、参加希望の確認時には、無理強いしないよう十分に配慮し、個々の希望を優先して選出した。行先は、車で片道30分のところにある動物園とし、少数のグループ分けを行ったうえで、1日掛けて実施した。

- ② 個人に対して行った外出支援では、外出先や外出の目的を確認し、必要に応じて予約の連絡や金銭面の状況により費用の準備を行った。個別対応では、個々に具体的な目標があるため、一番重要なのはスケジュール調整であった。行先によっては遠方となり、長時間の個人業務が止まることになるため、職種間での協議も必要とされた。近隣であっても、目的を達成するために必要な時間を十分に取り、対応した。主な行先は、お墓参り、専門店で衣類を購入したい、自分に合った化粧品を選びたい、美容院へ行きたい等である。

《4. 取り組みの結果》

安全面や体力的に負担がないか配慮し行った結果、「行けて良かった」「楽しかった」と率直な感想を頂いた。グループでの外出支援では、今後も外出したいと体力づくりを始めたり、よそ行き用の服を気に掛けて選ぶ利用者の姿もあった。団体行動が得意ではないと思われた利用者が、思いのほか興奮して楽しんだり、新たな発見もあった。個別での外出支援では、願いが叶ったという満足感と個別に対応されたという特別感を得られたようであった。施設内では聞けない思いが伺えたり、買物中ではないと変わらない性格的な行動や屋外での身体能力を客観的に評価することが出来た。一番懸念していた、帰園後の体調不良もなく、逆に生き生きとした表情が印象的であった。

《5. 考察、まとめ》

外出頻度が減少する要因には、体力面での不安、外出がおっくう、外出中のトイレが心配、具体的に行きたい場所がない等が挙げられる。高齢者は、加齢による心身の変化から、習慣的に行き慣れていた場所であっても不安に思う時もあり、不安を抱えながら外出することで様々な危険リスクを高くする悪循環にも繋がる。また、身体的・体力的に一人で外出する能力がありながら、外出できていない利用者の中には、精神面の問題を抱えているケースもある。そのため、支援する対象者の選出や外出における動機づけには、十分に配慮して進めなければならないと考える。また、業務の一環で行う外出支援は、組織内で行える限界を知り事前の準備と実施後の振り返りや次に繋がるための改善点を確認することが重要と考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

・東京都健康長寿医療センター研究所

<プレリリース>高齢期の社会的孤立と閉じこもり傾向による死亡リスクが約2倍であることを発見 (<https://www.tmg Hig.jp/research/release/2018/0727.html>)

《8. 提案と発信》

外出支援に限らず、どのようなことでもその人らしく生活するきっかけになると考える。しかし、外出は高齢者にとり満足感や解放感を得ることができ、意欲増加や健康増進にも繋がり、職員にとっては充実感や働き甲斐を感じるようになったのではないだろうか。